

成長促進と 願望チートで 異世界転生スローライフ?

Seichou sokushin to
Ganboucheat de
Isekai tensel slowlife?



Gotou Ren

後藤 蓮

Illustration

満水

登場人物紹介

カーム

リーデンス子爵家当主。
仕事ができる、ぼっちゃりイケメン。
ルカルドの父。

アリー

ルカルドの
専属メイド。

セル

リーデンス家の
執事。

ルカルド

本作の主人公。
神様がくれたチートにより
“ぶっ壊れた”能力を持つ。
愛称はルカ。

エレナ

ルカルドの母。
ルカを溺愛するあまり
時々過激な行動も……

リーナ

ルカルドの姉。
男勝りな性格で、
母に負けないくらい
ルカを溺愛している。

アルト

リーデンス家の長男。
大人しい性格だが
食べ物へのこだわりは
人一倍。

プロローグ

俺の人生を一言で表すなら、不幸だ。

早くに両親を亡くし、叔父^{おじ}の家で育てられた俺は、高校卒業後、とある企業に就職した。ところが、その会社というのが……絵に描いたような超絶ブラック会社だった。

月の残業百時間超えは当たり前で、休みは月に一度あればいい方。それでいてボーナスも残業手当もつかないというひどい有様。

それでも気持ちだけは負けないようにと頑張り、二年間辞めずに働いたが、二十歳の誕生日を迎えた今日、俺は晴れて無職になった。

うん、自分の意思で退職したわけじゃないよ？

朝出社すると、オフィスがもぬけの殻^{から}だったのだ。

どうやら社長が夜逃げしたらしい。日頃から経営が危ないんじゃないかと思っていたけど、まさかこんなことになるとは思わなかった。

で、上司から電話で自宅待機を命じられたというわけだ。無・期・限・の・ね。

当然、今月分の給料だって振り込まれるはずがないので、家賃の支払いもままならない。二年も逃げずに頑張ってきたのにこんな結果か……俺って一体なんのために生きてるんだろう……

俺は目の前の不安と将来への絶望にめまいを覚え、ふらふらとした足取りで帰路についた。

そんな陰鬱な帰路の途中にそれは起こった。

俺の視界に飛び込んだきたのは、蛇行運転するトラック。運転手が居眠りをしているのか、赤信号でもスピードを緩める気配がない。

その進行方向には、信号待ちの女子高生が二人いたが、イヤホンをしていてトラックに全く気がついていない様子だ。

このままでは、あの二人はトラックに轢かれて死んでしまうだろう。

俺は、目の前の光景を冷静に分析していた。

——でも、体は冷静ではなかった。

気づけば走り出していた。

ああ、どうして俺は女子高生を助けようとしているんだ？

今から走ったところで、間に合うかどうかギリギリのタイミングなのに。

下手をすれば自分も巻き添えを食らいかねない。

まして、見ず知らずの他人だ。

自分の命を張る必要なんてどこにもない。

見て見ぬふりをすればいいのに。

現に、この場にいる周りの人達は、足を動かそうとはしていない。事態に気づいていても、ただ呆然と見ているだけだ。

おいおい、いい大人が揃って女子高生を見殺しかよ。

まあ、それが普通なのかもな。

ああ、ほんと、なんで俺はそっち側にいないんだ。

どうせ、俺が死んで悲しむ家族も友達もいないんだし、根本的に彼らとは生きている世界が違っただろうな。

——そんな人生もここで終わりそうだけど。

達観した思いで人生を振り返りながらも、俺は女子高生二人をトラックの進路から押し出そうと、決死の覚悟で駆け寄る。

さすがに二人もトラックの存在に気づいていたみたいだが、驚いて足が竦すくんでしまったのか、その場で棒立ちになっていた。

突き飛ばす瞬間、二人の顔が見えた。

二人とも、めちゃくちゃ可愛い……

なんとも場違いな考えだけど、それでも、人間いざという時にはくだらないことが頭に浮かんでくるものらしい。

だって、仕方ないだろ？

可愛いのは正義なんだから。

……ああ、俺が生まれてきたのは、今日この二人の命を助けるためだったのかもな。ははっ。

女子高生の命の恩人として死ぬるなら、悪くない。

見知らぬ女子高生よ、俺の分まで生きてくれ。

せめて……幸せにな……

そこで、俺の意識は完全に消失した。

こうして、俺の二十年の人生は呆気あっけなく終わりを迎えた。



目が覚めると、真っ白くて何もない空間にいた。

あれ？ 俺、さっきトラックに轢かれて死んだはずじゃなかったか？

もしかして、さっきのは夢だったのか？ てことは、社長が夜逃げしたのも夢か？

……いや、そんなわけないよな。目覚めた場所が自室ではない時点で察した。

ここは多分、死後の世界ってやつだろう。でなければ、こんな現実離れた光景、説明がつかないからな。

さて、現状把握はあくも済んだことだし、寝るか。

「おうい！ なんて寝るんじゃ！」

今さらどうしようもないと寝ようとしたところで、急にとつもない声量で知らないお爺じいさんがツッコんできた。

びっくりして振り向くと、白髪はくはつと長い白髭しろひげが特徴的なしわしわのお爺さんが杖を片手に立って

いる。

そこで、俺はやっと気がついた。

そうか、ここはのど自慢大会の会場だったのか、と。

「いや、違うわい！　なんでのど自慢大会の会場だと思ったんじゃ!?　意味がわからんわい！」

え？　何？　ここ、のど自慢大会の会場じゃないの？

なのにあんな大声出してんの？

だとしたらお爺さん、近所迷惑だから叫ぶのはやめた方がいいですよ。

それに、叫びすぎると喉^{のど}壊しますよ？

いい歳なんですから、もつと体を労^{いた}わらないと……

「いや、なんでお主はそんなところに疑問を持っているんじゃ！　それに儂^むの体の心配をする前に、もつと気になること、あるじゃろう!?」

そんな風^{ふう}に促^{うなが}してくるお爺さん。ああ、なるほど、このお爺さんは、かまってちゃんならぬ、かまってお爺ちゃんか。

「あー、もういいわい。いつまでも付き合っていたらきりがない。勝手に説明を始めるから、しつかりと聞いておくんじゃぞ？　まず、ここはお主の部屋ではない。お主達の言うところの天界。

『神の部屋』という場所じゃ。ちなみに儂は不審者ではなく、ここの住人、神じゃ」

神……だと？

「ああ、そうじゃ、儂が神じゃ」

本当に……神なのか？

「本当も本当、その名の通り、神じゃ」

……いやいや、ないない。さすがになんの取り柄^えもない俺が、神に会えるわけがない。そんなの他でもない自分が一番わかつている。

これはきつと、新^{あら}手の詐欺^{さぎ}か何かだろう。名付けるなら、神神詐欺というのがベストだな。

「……」

なんだ？　急に黙っちゃったな、この“自称神（笑）”のお爺さん。

それにしても、今どき自分で神を名乗るとか、このお爺さんやバイやつなんじゃないのか？　この場に携帯電話があれば、即通報したんだけどな。

ん？　ま、待てよ？　よく考えてみたら、俺はこのお爺さんに出会ってから何も喋^{しゃべ}っていない。なんで声も出していないのに、このお爺さんは、俺の声が聞こえているかのように振る舞^{しな}えているんだ？　もしかして心を読んできるとか？

いや……まあ、どうでもいいか。

「ええっ!?　なんで答えにたどり着いた瞬間に！　一番重要なことが理解できたはずなのに！　そ

れをどうでもいいとポイ捨てするんじゃない!? おかしすぎるじゃろ、お主―」

はあー……。あー、うん。その、もう面倒なんで、おふざけはこのくらいにしておきませんか？
お爺さん？

「……」

えっ？ 無視ですか？

「……」

おーい！ 神様ー？

「ぜんぶ……」

ぜんぶ？

「全部お主のせいじゃろうが！」

うお!? びっくりした！

いきなり大声出すのはやめてくださいよ。

「はあ、はあ、はあ……。まさか、ここまで疲れるとは思ひもなかったわい……」

あー、はい。疲れてるところ申し訳ないんですけど、神様は一体全体なんの御用があつて、私めのような一般人をこの……神の部屋？ に連行したんでしょうか？

ご説明して頂けると非常に嬉しいんですが？

「なんでいきなり、そんなへりくだった言葉遣いになったんじゃない？ いや、それよりも、なんじゃお主。えらく冷静に物事を考える割に、自分の状況を理解しておらんのか？ ほれ、ちよつと、先程までのことを思い返してみい」

なんか馬鹿にされているような感じがして、少し癪に障ったが、トラックに轢かれて死んだって話なら、ちゃんと理解してる。

「ほう？ 普通は死んだとわかったら取り乱すものじゃが、お主は冷静じゃな？」

あー、うん。

まあ、家族はいないし、今まで生きてきて楽しいことなんてあんまりなかったから、未練もない。どうせ、人なんていつかは死ぬ。

どんな理由であれ、人が死ぬ時はその人の運命的な寿命だと考えるようにしている。

俺の寿命はさつきまでで、必ずあそこで死ぬ運命だったんだと思えば特にショックではない。

それに、最後にいいことがあったからな。

まあ、そうは言っても、別に死にたかつたわけでもないけどな。まだ連載中の漫画の続きとか見たかつたし。

「いや、漫画って。死にたくない理由が小さすぎるじゃろ……。まあよい。それにしても、お主は珍しい考え方をするのう。死ぬ時は運命で決まっている……か。確かに、その通りなのじゃがな。

お主の場合は、ちと事情が違うのじゃ」

へー。死の運命って考え方は間違ってたんだな。まあ、合っていたからどうというわけはないんだけど。

それよりも、俺の場合は違うって、どゆこと？

「ああ、実はな、本来ならお主はあの場では死なずに生き残る運命じゃったんじや。あれからさらに三十年以上は生きるはずじゃったが……何かの手違いで、お主の運命が捻じ曲がってしまったよ
うなのじゃよ」

なるほどなるほど。

つまり、俺は本来ならまだ死ぬ運命ではなかったのか。

「手違い」ということは、恐らく神様かそれに準ずる存在が仕事をミスって、そのせいで俺の運命が変わってしまったといったところだろう。

で、謝罪するために俺をここに呼び出したと？

これなんてラノベ？

「ラノベ？ なんじやそりゃ？ いや……まあ、とにかく、そういうことじや。今回は誠に申しわけなかった。それで……」

ああ、うん。この流れだともしかして、俺の魂が今まで生きてきた世界での輪廻転生の輪から

外れてしまい、そのお詫びにチート能力を授けて別世界に転生させてやろう——とか、そういう展開になるんじゃないか？

いや、絶対そうだな。

「む？ な、何故わかったんじや？」

ほらね！

そして、転生するのは今まで生きてきた世界とは違って、剣や魔法があるファンタジーな世界。

そこにはレベルやスキル、色んな能力が数値となっていてわかる「ステータス」といった、ゲームみ
たいな仕組みがあるんじゃないの？

ちなみに、ゲームっぽい世界になっている理由は、俺が生きていた世界に干渉した神様が、何か
のゲームを元に新しい世界を構築したから。

まあ、だいたいそんな感じだろうね。

「!? 凄^{すば}い洞察力じやな。いや、まさかさんの説明もせぬまま全部先に言い当てられるとは思って
ておらんかったわい。少しばかり悔しい気持ちになっておるのは……認めたくないものじやのう」
わお！ まさか本当に当たるとは！

しかし、本当に異世界転生があるとは思わなかったわ。てか、俺がその当事者になるなんて、さ
らに思ってもみなかった。

神様が悔しがっている件に関しては、俺は関係ない。

あつ、ちなみに転生に拒否権ってあるんだろうか？

「いや、拒否することもできるにはできるが、その場合は魂、こと跡形もなく消滅してしまうんじゃないから、こちらとしても拒否するのはやめてもらえると助かるんじゃない？」

なるほど。おーけ！ 理解した！

でも、断ります！

「——いや、なんでじゃー！」

あー、すみません。今のはその場のノリです。気にしないでください。

それで、異世界転生についての正式な返事は、了承ということでもいいですよ。

神様のお詫びを受け取らないのも悪いんで。

ささっと異世界転生させちゃってください。ばっちこーい。

「軽っ!? 軽いぞ、お主！ だいたい、まだお主にお詫びの力を授けてないんじゃないから、飛ばせないわい！」

ああ、そうだったそうだった。ちなみに、能力は選べたりするんですか？

「まったく……なんで神である俺がツツコミをせにやならんだ。えーと、能力が選べるのかだったな。まあ、選べるといえば選べるが、選べないといえば選べないな」

んー？ もしかして、何種類もある中からくじ引きのように俺が選んで、その能力を授かる。だから、選べるけど選べない……ということであってますか？

「……その推理力は一体全体どこで培ったのじやろうか？ 説明の手間が省けている割に、時間が節約できていないのは不思議じゃが……。まあ、お主の言う通りで間違いない」

ふむふむ。まあ当たっているってことでいいんですね。

じゃあ、時間もないし、早速選ばせてもらっても？

「いや、時間がないなんて誰が言ったんじゃ？ はあ……もういいわい。お主にツツコミ入れるのもさすがに疲れてきたしの。さっさと済ませてしまおう。では、このカードの中から一枚好きなのを選べい」

はいはい。

俺は心の中で適当に返事をして、神様が並べたカードの中から一枚を抜き取……ろうとして、手が滑って二枚引いてしまう。

やっべ、間違って余分に引いちゃったよ。まあいつか。とりあえず見てみよう。何が出るかな？ 何が出るかな？

【成長促進】【願望】

はっ？　なんだこれ？　成長促進と願望？　てか、この能力の説明とか書いてねえの？　どう見ても微妙そうなんだけど？

「……いや、まあ、うん。二枚引かれたのも驚いたが、そのどちらも儂がよう覚えておらん、大したことなさそうな能力っていうのも……。うん、まあ、引き直しはできないし、どっちもシヨボ……っと、あまり強力そうなスキルではないから、特別にお主には二つの能力を授けよう。その力で新しい人生を豊かに過ごすのじゃ。それでは、お主に幸福があらんことを……さらばじゃ！」

はっ？　え？　マジで能力の説明なしですか？　嘘でしょ！　おーい、神様！

てか、サラッとシヨボいって言いかけたよな！

ちくしょう！　もう消えやがった、あの爺さん。

しかも、最後に「さらばじゃ！」とか、ベタすぎるだろ！

まったく、仕方のない神様だな……

はあー。それにしても、これまで自分の運の悪さは自覚してたけど、まさか死んだ後も同じだとは思わなかった。

でもまあ、仕方ないよな。

こうなったら、新しい人生は運が良くなることを願うしかない。

来世は運が良くなりますように！　お願いしまっす！

幸運（下）　LV…1を取得しました。

え？

頭の中にそんなアナウンスが流れた直後、俺は意識を失った。

第一章 俺氏爆誕

フワツとした浮遊感とともに目が覚めると、突然物凄い光が視界いっぱいに広がった。
眩^{まよ}しさのあまり、俺は思わず顔をしかめる。

「ぎゃあー！ おんぎゃあー！ (うお!! なんだ!?)」

びっくりして声を出したつもりだったが……どういうわけか、全てぎこちない泣き声に変換されてしまった。

いったい何故？

しかし、そんな疑問はすぐに自己解決した。

そういえば、神様に無理やり異世界に転生させられたんだっけか。

いや、無理やりではないか？ まあ、とにかく無事に新しい人生がスタートしたようで何よりだ。
状況がわかって安心したのも束^{つか}の間、急に睡魔^{すいま}が襲^襲ってきた。

あー、やべえな。目覚めたばかりだけど、また寝ちまいそうだ。

てか、目を開くこともできねえわ……

周りには何人か人がいるような気配が感じられるけど、生まれたてでまだ耳が機能していないのか、上手く声を聞き取れない。

いや、てか、マジで眠いな……

ダメだ……もう……

俺は睡魔^{あらか}に抗^あうことができず、新しい人生が始まってから一分としないうちに、再び眠りについた。

新しい人生が始まってから三日くらい経過した。

最初は目も開けられなければ耳もあまり聞こえない——ていうか、そもそも五感がろくに働いていない状態で、起きている間は不安が拭^ぬえなかった。

しかし、栄養補給（母乳）と睡眠を何度か繰り返すと、魂が新しい体に馴染^{なじ}んできたのか、なんとか五感を取り戻す（？）ことに成功した。

とはいえ、まだ自分の置かれている状況は何もわかっていない。

何せ体にまるで力が入らなくて、自分で寝返りをうつのもままならないのだ。

こんな時に身体強化みたいなスキルがあったら、自分を強化して今よりも便利な生活を送れるようになるんじゃないか。

まあ、そんなスキルが存在するのかわかんないけど。
でも、ないと決まったわけではないので、一応“欲しいな”と願っておく。
すると……頭の中に聞き覚えのある声が鳴り響いた。

身体強化（下） LV..1を取得しました。

ん？ なんだ？

これは確か……そうだ！ あの神の部屋とかいうところで意識を失う前に聞いた声だ。
確かあの時は、“幸運（下） LV..1を取得しました”とか言ってたよな。

うん。でも、どゆこと？

てか、なんで何もしてないのに、身体強化なんて取得したんだ？

スキルだよ、これ？

確かに、あったら便利そうだから欲しいなーって、軽いノリで願ったけどさ。そんな簡単にゲットできちゃうの？ さすがにチヨロすぎると思うんだよなー。

あれこれ考えていると、俺が寝ている部屋にある唯一の扉が開いて、誰かが入ってきた。

「なあさたるさまかあれをかたけはわ」

満面の笑みを浮かべ、優しい声で何かを言いながら近づいてきたのは、多分俺の母親だ。

何故“多分”なのかというと、言葉がわからないからだ。いつも彼女が母乳を飲ませてくれるから、母親だとは思うが、乳母^{うは}という可能性もある。

光り輝く長い金髪も、整った顔立ちも、見惚^{みと}れるほどに美しい女性で、もし本当に母親なら、きつと俺は彼女に似た美形イケメン男子になるのだろうな。

将来がとても楽しみだ。

「はさかまらさまんはたやらかたま」

その隣^{となり}では、栗色の髪の毛で、ふくよかな丸顔に丸体型の男性が、これまた慈愛^{じあい}に満ちた目を俺に向けてながら何か話している。

このワガママボディーな男性が、多分俺の父親だ。彼はいつも母親（仮）と一緒に俺を見に来ては抱きかかえてくれるから。

「はなたかあわはちかあにらかま？」

「あねまけほやかはちはた」

「あなむさたわはたかたやら？」

「かたやらさたらさまら」

異世界転生するって時点で、言語は日本と別物だろうなと覚悟はしていたが、言葉がわからない

というのはどうにも不安だな。

まあ、これからゆっくり理解していけばいいか。

あの神様お爺さん、気を利かせて言葉くらいわかるようにしておけよ——と、ちよつぱり不満に思ったのは内緒だ。

まだまだこの世界についてわからないことだらけだが、不思議と嫌な感情はない。

ブラック企業に勤めていた時はあんなに生きるのが辛かったはずなんだけどな……

両親の笑顔を見ると、何故か今世では幸せに楽しく暮らせそうな気がする。そんな思いを抱きながら、俺はまた眠りについた。



新しい人生が始まってから一週間ほど経過した。

最近の日課は、誰も見ていない時を狙っての筋トレだ。

え？ 生後一週間なのにトレーニングなんてできるわけがないだろうって？

甘い甘い。その考えは砂糖十杯分くらい甘いよ。

ここは異世界であり、俺は転生者だ。そして、俺は転生する前に神様から成長促進というスキル

を押し付けら——頂いている。

この成長促進というスキルについては、いまだ詳しくはわかっていないが、名前から判断すると、普通の人よりも早く成長できるというスキルなのではないかと思っている。

まあ、あくまで仮説でしかないのだけれどね。

ただ、普通なら生後数日の赤ちゃんは筋トレなんてやろうと思ってもできない。——てか、そもそもやろうとも思わないだろうけど。まあ、そこら辺はいい。

俺もトレーニングを始めてすぐの頃は、膝をついた状態での腕立てもできなかった。それどころか、寝返りしてうつぶせになることすらできず、せいぜい手足をじたばたさせるくらいだ。

でも、身体強化スキルを発動しながら手足を根気よく動かし続け、諦めずに何度もトライしているうちに、段々と体力や筋力がついてきた。

その結果、どんどん成長していき、生後一週間にして腕立てや背筋、高速寝返りなんかもできるようになった。

これぞ俗にいう成長チートというやつなのだろう。

こうして、母乳を飲むか寝るかしかなかった俺の生活に、新たに筋トレが追加された。これではらくは退屈しないで済む。

それにしても、筋トレをした後はいつも以上に物凄く眠たくなってしまふ。

とはいえ、この睡眠をとるのも俺にとっては重要なので、抗うことなく睡魔に身を任せるようにしている。

さあ、今日も寝ようかな……

気持ちよく眠っていたはずなのだが、何度も何度も絶え間なく送られてくる刺激——頬へのツンツン攻撃を感じ、目が覚めた。

急に目を開けたので視界がぼやけていたが、時間が経つにつれて段々とはっきり見えてくる。頭を少し動かすと、見知らぬ子供二人が、俺の頬を両サイドからツンツンツンツンしているのがわかった。

何してんだこいつら？

一人は母親と同じ金髪で、父親似のワガママボディーに丸顔の、おぼっちゃんなみtainな男の子。歳は……見た感じ五、六歳くらいだろう。

もう一人は、父親とそっくりな栗色の髪で、痩せ気味の少女。てか、美少女？

男の子よりもツンツンする力が強くて、どこかお転婆な気質を感じさせる。歳は……三歳くらいだろうか？

それにしても、ただ頬をツンツンしてくんの？ いい加減鬱陶しいんだけど？



そんな思いが伝わったのかどうかはわからないが、二人は頬をツンツンするのはやめて、今度は俺の頭をわしゃわしゃと撫^なではじめた。

うーん。なんだかわからないけど、妙に心地いい。

このままもう一度眠れそ……っいてえ!?

痛い痛い痛い痛い!! ちょ! おま! もっとさつきみたいに優しくっ!

マジで痛いって!

突然、撫でる力が先程とは比べものにならないほど強くなり、痛みを感じて思わず顔をしかめてしまう。

すると、後ろから母親であろう美人さんが二人に何かを言っ、俺を抱き上げてくれた。

美人さん、誰だかわかんないけどこの二人、ちゃんと叱^{しか}っっておいてくださいよ? さっきのマジ

で痛かったからね。

年甲斐もなく泣いちまうかと思ったわ。ん? いや、今の俺は赤ん坊だ。むしろ泣く方が普通か。怒られたわけではなかったのか、二人は母親に何かを言われた後も、まだ俺を見て楽しそうにはしゃいでいる。

が、新たに入ってきた父親に抱きかかえられて、二人とも部屋の外に連れていかれた。

もしかしてあの二人って、俺の兄と姉なんだろうか?

どことなく両親に似ているところがあるし、絶対そうだな。

うーん。それにしても、男の子の方はかなりのぼっちやさんだったな。顔のパーツ一つ一つは整っていて美形なのに、全体のフォルムが勿^{もた}体ない感じだ。

まあでも、健康そうだからいいか。

そんな風に考えていると、母親が心地いいリズムで歌を歌いながら、俺を抱いている手をゆらゆらと揺らし、寝かしつけはじめる。

これには、さすがに抗うことはできない。

今世、いや、前世からの経験も含めて、至高の時と呼べる時間だ。

俺は、やってきた睡魔に身を任せて、ゆっくりと眠りについた。



新しい人生が始まってから二週間が経過し、ようやく言語がわかるようになってきた。この理解の速さにも、成長促進スキルが関係しているのだと思えて仕方がない。

今、俺が最も気になっているのは、この世界のことだ。

魔法と剣のファンタジー世界で、スキルという特殊能力なんかも存在しているという。

確か神様は、この世界にはステータスという自己の能力を数値化した指標があるとか言っていたはずだ。……いや、よくよく思い出すと、俺が自分でいわゆる異世界転生モノのテンプレ要素を説明していただけた気がするが……

まあ、とにかく、何が言いたいのかというと、自分の能力値を確認できるのならしてみたいということだ！

うん、決めた。絶対に今日中にステータスを確認する方法を見つけてみせる。絶対にだ。これは確定事項だ。

……うーん。とりあえず、前世で読んだ異世界転生小説の定番である“ステータスオープン”とか唱えてみようかな？

「あっきや、きゃっきやあ!! (ステータス、オープン!!)」

相変わらず出てくるのは赤ちゃん言葉であるが、ちゃんとステータスオープンの意思を込めているから問題はない。

ルカルド・リーデンス 0歳 LV:1

体力:10/10 魔力:3/3

筋力:3 耐久:1 速さ:1

器用:1 知力:30 精神:5

【称号】

リーデンス子爵家次男 転生者

【パッシブスキル】

幸運(中) LV:7 言語習得(上) LV:9

【アクティブスキル】

身体強化(下) LV:6

【ユニークスキル】

成長促進(神) LV:MAX 願望(神) LV:MAX

俺がステータスオープンと言ってすぐに、大量の文字情報が頭の中に流れ込んできた。目には見

えないけど文字列として認識できる……不思議な感覚だ。

ていうか、この『ルカルド・リーデンス』って誰やねん！

俺は生粋^{まっすい}の日本人……じゃなくて、今はもう転生して新しく生まれ変わっていたんだった。この世界に日本なんてないしね。すっかり忘れてたわ。てへぺろ？

待てよ……？ 今気づいたけど、両親も二人の兄と姉もだけど、全員ヨーロッパ系の外国人っぽい顔立ちだったよな……？

じゃあ、もしかして……もしかなくても、このルカルド・リーデンスってのが俺？

さっき頭の中に流れてきたのは自分のステータス情報だろう。疑う余地など皆無^{かいむ}だったわ。

そうとわかれば、もつとゆっくり見てみよう。

……まだ色々と理解できていないが、一つだけ確かなことがある。

そう、それは……俺はまだ赤ん坊だから、今の状態だとめちゃくちゃ弱いってことだ。

いやいやいや、体力と知力以外まさかの一桁ですよ。

てか、能力値六つのうち半分が1で揃ってるね。知力が高いのは、多分前世の記憶があるからだろうけど、その他が絶望的。

はははっ。こんな状態で襲われたら即死だわ、即死！ 赤ん坊だしな、当たり前だ。

称号に関しては、どちらも普通だな。

転生者というのがモロバレなのが気になるから、後で隠蔽^{いんぺい}スキルを取るように願っておこう。

……ん？ よく見てみるとスキルが全体的におかしくね？

幸運って、確か(下)でレベル1とかだったはずだよな？ なんで(中)？ しかも、何もして

ないのにレベル上がりすぎじゃね？

身体強化だって、まだ取得してから大して時間は経っていないくて、筋トレの時くらいしか使っていないのにすでにレベル6だし。

しかし、スキルレベルに比べると、ステータスの方はイマイチだな。あんなに毎日筋トレしてステータスの上昇幅2つて……やべえな。でも、体力が二桁になってるから、効果はあるのか。

元々の値^{あたい}がわからない以上比較しようがないけど、ほかの数値を見るに、最初は体力も一桁だったに違いない。

このステータスの中で俺が最も気になるのは、ユニークスキルとされている二つ。神様にもらった成長促進と願望。

これ、どっちも(神)なんだけど、(神)ってなんやねん。

レベルMAXっていくつやねん。

わからん。なんにもわからん。

ただ、なんか凄^{ふんいき}そうなお気^きだけは伝わってくる。くそ、せめてヘルプ機能とかないのかよ、異

世界！

あー、いいよう。めんどくさいし。

多分だけど、幸運も身体強化も願望で得られたスキルだろうし、スキルレベルが上がる速度が異常なものも、成長促進の効果だろう。

神様は、なんかシヨボいとか言ってたけど、この二つをセットで持つて俺って……もしかして、チートキャラ？

とりあえずステータスが見られた。

それは実に喜ばしいことだ。まさにファンタジーで、エキセントリックで、ゲームみたいで……とても興奮した。

だが、まだ甘い。まだまだまだ甘い。角砂糖十粒入れたコーヒーよりも甘い。

俺はステータスくらいで満足するような甘ちゃんではないのだ。

確かに、あんなシヨボいステータスでも、実際にしたら満足感があつた。

だがしかし！

ファンタジックでエキセントリックなゲーム的世界には、もっと重要な要素がある。

それが使えなくて何がゲームだ、何が異世界だ。

使えないなら、転生した意味なんてほとんどなくなってしまう。この先の長い人生が灰色一色だ。

だから俺は願う。

何に願うかと聞かれてもわからない。神様でも仏様でもなんでもいい。重要なのは、何を願うかのだから。

お願いします!! どうか!! どうか!! 俺にも魔法が扱えますように!!

俺は願う。ひたすら願う。

そして、念じ続けること数秒……

魔力感知 (下) LV…1を取得しました。

魔力操作 (下) LV…1を取得しました。

あつ、早つ。

こんな簡単に取得するんだ。いや、確かに身体強化スキルの時もこんな感じだったか？ まあそんなことはない。

とりあえず……

「あーううーあーあー！ あーあーあー！（イイーヤッター！ キタァー！）」

俺は、いまだ赤ちゃん言葉ではあるものの、全力で雄叫びを上げた。

立ち読みサンプル はここまで

だって、ついに、ついにきてしまったのだから。

これで俺も、ようやく魔法使いとしての第一歩を踏み出したということだろう？

何故か●魔法みたいなスキルじゃなくて、魔力感知と魔力操作だったけれど、偉大なる一步には違いない！

よし、さっそく試してみようじゃないか。まずは魔力感知からだ。

魔力感知を発動……つてこれ、パッシブスキル、つまり常時発動型だった。

でも、全然魔力なんて感知できないけど？ 本当にパッシブスキルなのか？

とりあえず、自分の中に魔力があることはわかっているんだから、一旦集中してみよう。

なんだろう？ 体の内部全体に何かモワモワとした温かいものが巡^{めぐ}っている感じがする？ ん？

血液、なわけないよな。

血液が全身を巡っている感覚なんて自分でわかるわけがない。となると、これが魔力……なのか？

いや、魔力はずだ。でなければ、こんなもの感じられるわけがない。

だとすると、これを操作すればいいのか。

待てよ？ 魔力操作つて……やっぱりパッシブスキルじゃねえか！

もう勝手に動いて全身を巡りまくってるんですか？

常時発動タイプで、すでに自動で操作されているなんて……認めない！ そんなつまらないもの、俺は認めんぞおー！

謎のテンションで、魔力操作スキルに宣戦布告すると同時に、コントロールを奪うために試行錯^{しこうさく}誤を開始する。

全自動で動いているというなら、無理やりにでも俺のものにしてやるよ！ 覚悟しておけ、魔力操作スキル！

数分間の死闘の末、ついに俺は魔力操作スキルに勝利した。

「あー、あー、あー……!! (ふっ、ふふっ、ふはははは！) ううー、うーあー! (見たか、これが俺の力だ！) あー、あうあー、ううああ。うーあー、ううーあー。ああうーあー、あうあうー、あうーあーあー……うあ! (だが安心しろ、魔力操作スキルよ。お前は死ぬわけではない。俺が丁寧に、大事に使ってやるから、今後も俺のために力を貸してくれよ!) あうっ! あうう、うーあー!! (ふっ! これにて、一件落着!!)」

発した声は「あ」と「う」だけで構成されていたが、いい感じに決まった——と思う。

かくして俺は、ついに自力での魔力操作を行なうことに成功した。

同時に、今保有している魔力を使い果たし、気絶するように気持ちよく眠りにつくのだった。